COMMUNITY RESILIENCE RESEARCH 2021



COMMUNITY RESILIENCE RESEARCH 2021

活動概要

「人新世」という言葉に、多くの人々が注目するようになりました。 大量に生産・消費・廃棄され続けるモノが、生痕化石となって地層を形成している時代を表していますが、グローバル化が進み、未来への確かな展望が見えない世界に生きるこの時代、つまり「人新世」は、世界の人々にとって決して好ましいものではありません。

新型コロナウィルスの世界的な感染拡大は、「人新世」の負の側面を改めて浮き彫りにしています。私たち一人ひとりが、この「人新世」時代をどのように生きてゆくべきかを、自分に引き寄せて考えていかなければならないのです。

近代の経済成長を押し進めた新古典派経済は、自然を資本に組み込み、経済成長は自然破壊を伴い不可逆的に加速しています。その意味において、「人新世」は欲望の資本主義によってもたらされた経済成長の帰結だとも言えるでしょう。これに対抗し、持続可能を重視するのであれば「定常社会」を実現する必要があります。「定常社会」では、生産力至上主義からの脱却を目指す脱成長など、経済成長とは異なる価値を基盤とする社会のあり方が重視されることになります。

搾取され、破壊され続けてきた「自然」についても、自然／社会の二元論的価値観や、人類が統治すべき対象としての自然という西洋的宗教観への批判とともに、新たな考え方や思想が提唱されています。その一つが、人と自然が繋がった一つのシステムとしての「社会生態系システム」です。社会生態系システムは、人も動物も植物も鉱物も道具も全てつながっており、システムの中では誰もが、アクターとして何か役割を果たすと考えます。技術発展とイノベーションの創出を前提とした「右肩上がり」を所与のものとした近代化がもたらした、さまざまな変化や変容は、自然と社会に影響を及ぼしました。このシステムの提唱者であるウォーカーら生態学者たちは、自然や社会はそれにどう対応しているのかを長期的に考察し、対応するべき時であると長年主張してきました。その際、重要になるのが「レジリエンス」という概念です。社会システムが攪乱を吸収しながらも、基本的な機能と構造を維持する能力である「レジリエンス」を備えた社会の実現が人新世に重要であることは言を俟たないのです。

私たちのプロジェクトでは、岐阜県本巣市北部の根尾地区という小さな地域でのフィールドワークを通して「レジリエンス」を考察してきました。福井県に近い山間部の旧根尾村は、近代以前から、何世紀にも亘って生き続けています。平安、戦国、江戸、明治、昭和といった時代の変遷や、戦争・大災害といった惨事、そして経済成長を基盤とした急激な近代化と、時代の潮流に翻弄されながらも生き抜いてきた地域です。今、限界集落化や産業衰退といった問題に直面しながらも、これまでのように生き抜いていくレジリエンスが備わっていると、プロジェクトのメンバー一人ひとりがそれを実感してきました。

2021 年度の活動の総括として、本報告書『Community Resilience Research 2021』を発行しました。私たちが見つけたコミュニティ・レジリエンスを共有できれば幸いです。

Field Notes IAMAS OPEN HOUSE 2021

IAMAS OPEN HOUSE 2021 では、根尾を中心とする中山間部の古い集落でのフィールドワークを通して、学生メンバーが各自の視点でまとめたフィールドノートを展示した。



能郷フォレスト NOGO FOREST

王 芯藍　WANG XINLAN

根尾能郷でみた風景、建物や人などは、中国人の私がメディアを通してイメージしていた日本の田舎暮らしとは少し違っていた。自分の目でみて素敵だと感じた根尾を、外国人の視点から記録した。



見えない動物

路 雨嘉　LU YUJIA

能郷集落でのフィールドワークで、注意深く観察しないと見つけられない動物がたくさんいることに気づいた。近代化に伴い、人間の生活から徐々に遠ざかっている「見えない動物」を水墨画で記録した。



一枚の手ぬぐいから

工藤 麻里　MARI KUDO

「1 枚の手ぬぐいから」は、ある女性の手ぬぐいをきっかけに、昭和 10-20 年生まれの 4 人の女性に「衣」に纏わる家の中と外の仕事のお話を伺った。4 人が生きる時代を「衣」を軸に女性視点で垣間見る考察の一部である。



能郷、耳を傾けて。

上森 拓　TAKU UEMORI

「能郷、耳を傾けて。」では、都市的な生活による生きづらさや体調不良を改善するためのヒントを求めて、都市と異なる環境や地域共同体として能郷地域を調査した。調査内容を雑誌記事の様に編集・デザインし、ウェブサイトに掲載した。



解体

小林 玲衣奈　REINA KOBAYASHI

根尾能郷にて、解体作業が行われている家を見つけ、観察とインタビューを行い、まとめた。施主や解体業者、近所の人、分別されていく材など、家の解体という中に、色々な考えや循環があることが見えてきた。

「森へ into the forest」

春日　森の文化博物館　　探検ランドリニューアル記念展

既存の環境を捉え直し、新しい空間、新しい体験を構成する

岐阜県揖斐川町にある「春日森の文化博物館」は開館から 25 年以上が経過し展示物の老朽化に直面している。自然豊かな環境と展示空間の条件を活かした立体、音、映像で構成された新しい鑑賞体験と、ワークショップやスタンプラリーなど幅広い年代でも体験できる機会を提供した。



















「森へ into the forest」



展示：リニューアル後



パターンを配置したフィルムが干渉した像を作り出す



展示：リニューアル前

教員と学生とで数回にわたり館内の展示や周辺の森の散策を通じて、リニューアルするための条件や、歴史や文化、植生などの知識を深め、テーマを検討した。開館当初から常設されている金属フレームの迷路「探検ランド」は、10年ほど前から機材の老朽化にともない封鎖されていた。説明パネルを取り外しガラス越しに見える木々の見晴らしを活かし、透明フィルムを吊り下げた展示構成を検討した。木漏れ日、水面、生い茂る木々の形を抽象化し、直線、曲線、点などのパターンをフィルムや映像作品に配置した。緩やかな風によりパターンが角度を変え、干渉した像を作り出している。展示空間で再生される音は、屋外から聞こえるせせらぎの周波数と調和する人工音をコンピュータから自動生成し、部分的に変化しながらも調和した視聴覚体験を構成した。

春日　森の文化博物館　探検ランドリニューアル記念展

目的と成果

五感を揺さぶる体験へ拡張する展示空間（音・映像、インスタレーション）を構成したことで、封鎖されていた迷路（探検ランド）の空間の周囲や内部に鑑賞体験を提供した。
春日の長者の森の生き物たちをテーマにしたスタンプラリーは、来館した多くの子どもたちが館内を巡りながら楽しむ機会となった。ワークショップでは、葉の観察とフロッタージュによって形や葉脈を意識し、手から伝わる感触、色や匂い、配置を組み合わせた複合的な体験を提供し、博物館では葉の標本としてそれを展示した。
関連企画として、書、絵画、写真、映像の４名のアーティストによる展示や、野外コンサートのイベントも行われた。メディア（岐阜新聞、中日新聞、大垣ケーブル、岐阜放送）による取材効果もあり、会期期間中は約 500 名が来館した。

IAMAS の役割

常設展示「探検ランド」のリニューアルによって、既存什器を活かしながら、空間を変容させるケーススタディの提案
春日の動物や昆虫をモチーフにしたスタンプラリーのデザイン・制作・設置
春日の草木による草木染めの布を使用したスタンプラリー用のぼりのデザイン・制作・設置
葉の採集からフロッタージュによる標本を作るワークショップの企画・実施
薬草を用いた食を通した交流の機会の創出

担当教職員

瀬川 晃　　小林 孝浩
金山 智子　　吉田 茂樹

連携期間

2021.06 - 2021.12

スケジュール

2021.06　リニューアルの相談＋フィールドワーク＋撮影
2021.07　フィールドワーク＋撮影
2021.08　フィールドワーク＋撮影
2021.09　既存展示物の撤去
2021.10　展示搬入＋設営＋調整 , ワークショップの準備
2021.11　今後の意見交換

開催場所

春日森の文化博物館
（岐阜県揖斐郡揖斐川町春日美束 1902 番地 183）

連携先

春日 森の文化博物館 , 揖斐川町教育委員会

運営

企画・インスタレーション・ワークショップ・映像：瀬川晃　准教授
企画・コーディネーション：金山智子　教授
撮影・設営：小林孝浩　教授
什器・設営：吉田茂樹　教授
ウェブ・スタンプラリー：工藤麻里（M1）
スタンプラリー：路雨嘉（M1）
ワークショップ：小林玲衣奈（M1）
サウンド・インスタレーション：林暢彦（M2）
関連プロジェクト：Community Resilience Research プロジェクト



IAMAS 2022

2022.02.20-23

IAMAS 2022

2021 年度もプロジェクトでは、経済成長とは異なる価値観を基盤とする社会への移行において何が大切なのかを、山間部の小さな集落群でのフィールドワークを通して探求してきました。IAMAS2022 では、私たちがこれまでに見つけたコミュニティの「レジリエンス」を展示します。



解体から循環へ



「解体から循環へ」小林孝浩は、100 年前に山から切り出された木材で建てられた家が空き家となり、解体されている現場に光をあてました。その解体ゴミを追跡し、木質堆肥となって流通されたことを知り、自身の畑でもこれを使用しました。大量廃棄の中からも、何かが何かの素材となるサーキュレーションの可能性を提示しています。同時に、長期的視点で空き家の解体前後のさまざまな関係をみていくことは、まさにトランジションデザインにもつながっていきます。

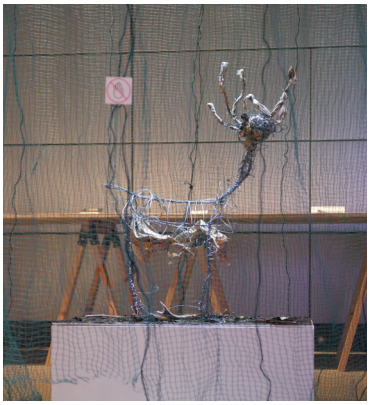
自立共生に反する現象をどのように考えていけばよいのか



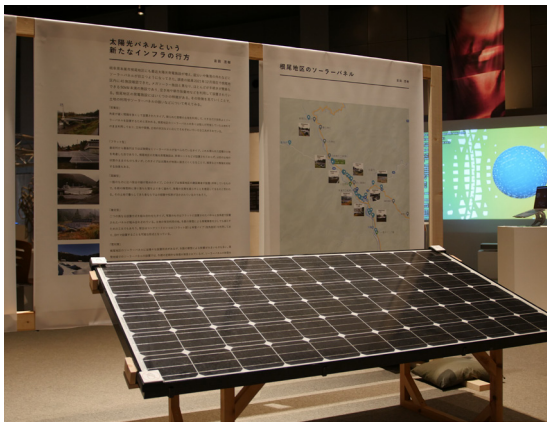


「太陽光パネルという新たなインフラの行方」これまで集落が自前で構築してきた水の分配システムを調査し、ブラックボックス化がすすむ近代のインフラに対し、コモンズとして自立したインフラをもつことの重要性を示してきた**吉田茂樹**は、今回、その根尾地域に急速に広がる太陽光パネル（発電施設）の状況を調査しました。設置された多くのパネルは、山や耕作放棄地を買い取った他所の人たちによるものです。この自立共生に反する現象をどのように考えていけばよいのか、私たちに問いかけます。

光があてられる



「あるかもしれないカタチ」根尾に増え続ける太陽光畑に対し、**小林玲衣奈**は「もしも太陽光パネルが違う姿だったら？」という、異なる問いをもってアプローチします。「ススキや雑草だらけの耕作放棄地よりも太陽光パネルの方がましやけど、でも私の山には太陽光パネルは絶対置かせない。」集落の人たちの矛盾するような声を受け、「あるかもしれない」太陽光パネルをデザインしました。もし、太陽光パネルが違う姿であったならば、それで埋め尽くされた山を見たならば、あなたはどう感じるのでしょうか？



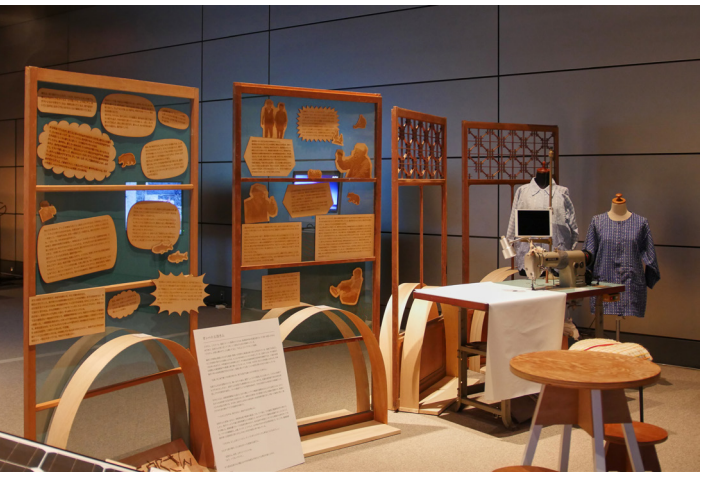
「鹿」路雨嘉は森の中に置いた針金の鹿が、人間以外の他者や自然と出会い、つながり、彼らと共にどのような世界を森の中に創造していくのかを試みました。山の生きものたちと共生する集落の人たちは、自然と自分と幾つもの関係をもち、さまざまな感情を抱きながら生きています。彼らの鹿に対する多様な語りを聴きながら、マルチスピーシーズ人類学の視点をもとに、山の人たちと生きものたちが織りなす世界を見つめました。



「根尾の盆踊り」70 代、80 代の住民が中心の根尾の盆踊り保存会には、根尾の盆踊りに魅せられた若者が東京や埼玉からも参加しています。本プロジェクトメンバーの**王芯藍**もその一人で、保存会の練習に度々参加してきました。ここにあるのは、伝統文化を消さないという平板な物語ではなく、年代、地域、民族を越えて享受されてきた幾重にも重なる物語。根尾の盆踊りが好きで一緒に踊るのが楽しいという単純な理由が、地域社会を超えた新たな文化を生みだす原動力となっています。それはジェイムズ・クリフォードの『生成の語り』であり、コンヴィヴィアルな場の創出だといえるでしょう。



「オッパの五郎さん」「根尾の女性とミシン」根尾最北部の越波集落に生まれた五郎さん (91 歳)。山奥にも押し寄せた経済成長の波に翻弄されながらも、その波には乗ることはせず、越波の山を守り、山を生かした仕事を創造することに人生を捧げ、今も起業を楽しむイノベーターです。スミさん (85 歳) は、60 年前、嫁入り道具の中古ミシンをもって根尾能郷集落に嫁ぎ、夫をなくした今は一人で暮らしています。かつて根尾にあった既製服縫製工場で、アイロン掛け係をしながら自力で覚えたミシン縫いは、スミさんの大切なスキル。愛用のミシンで、今も自分や友人の服を作るのを楽しんでいます。自分の手に長年馴染んできた技術や道具を大切にし、畑を耕し、作物を分け合い、山で自律した生活をおくる人たちの語りを**金山智子**が聴きました。





「システム化された現代社会への考察」本プロジェクトの考え方を支えている文献は多くありますが、その中心となるのは、ブライアン・ウォーカーとデイヴィッド・ソルトの『レジリエンス思考ー変わりゆく環境と生きる』、イヴァン・イリイチの『コンヴィヴィアリティのための道具』『生きる思想ー反 = 教育 / 技術 / 生命』です。**上森拓**は、フィールドワークの体験を通し、改めてこの文献を読みながら、システム化された現代社会を考察します。さらに、イリイチのコンヴィヴィアリティを参照しながら、未来の情報技術のあり方を示した緒方壽人の『コンヴィヴィアル・テクノロジー 人間とテクノロジーが共に生きる社会へ』にも触れながら、これからの社会システムにおいてレジリエンスとコンヴィヴィアリティをどのように考えればよいか、その道程を示していきます。



解体から循環へ

小林 孝浩

家主を失った古民家が自然に朽ちてゆく状況は、いたる所にあった。それらは日常風景の一部でもある。ところがある日、重機を使った古民家解体に遭遇した。その様子は、お金やエネルギーを掛けて廃棄物を生み出しているかのようであり、その地域ではむしろ不自然な行為に感じられたのだ。自然が処理してくれるはずの廃棄物はどこに行くのか。これをきっかけに、その経緯や廃棄物の行方を追った。









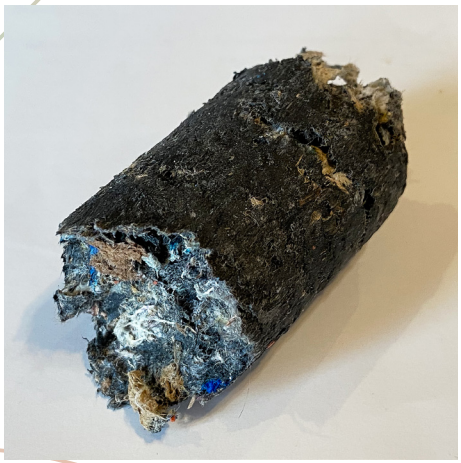














まず、解体の現場の業者から元請けへと辿り、依頼主に接見した。依頼主は 80 代男性、現在は岐阜市内に在住。「この家を建てるときは父親が自分の山から木材を切ってきて、近くの製材屋で加工した。これまでに自身も山に入り管理をしてきた」とのこと。一人暮らしされていたお婆さんが亡くなられ、空き家となった。更地にした後は特にどうするという計画はなく、「通りに面して目立つ場所だから、体裁を考えて」というのが大きな理由らしい。解体に掛かる費用は「同程度の古民家を土地付きで購入できるほど」だとか。

次に、解体業者から紹介された木材専門の中間処理業者を調査。そこでは生木 7 割、建築廃材 3 割を引き受けチップに加工。その 5 割は紙の原料、4 割は燃料、残りは堆肥やマルチとして利用される。一部、木の根や竹など、利用されにくい素材が山積みとなっていた。今年の 1 月、同社は電力会社等 3 社で共同し、地産地消の再生可能エネルギーを推進すべく、来年 10 月の稼働を目指してバイオマス発電所の建設に着工した。

今回、直接関係はしないが、木質廃棄物を軸足として西濃地域の処理業者を 2 箇所とその連携業者を調査した。一つは、我が家の畑用に堆肥を調達しており、堆肥製造の最下流で粒度の調整を行い出荷する業者。その堆肥は、ホームセンターでも流通しているとのこと。この施設の上流には大きく二つの工程を担当する業者が存在し、食品加工会社から出る残渣を受け入れ、これに他社から調達したウッドチップを混ぜて一次発酵する工程（6 日間程）、その後に切り返ししながら二次発酵する工程（2 ～ 3 ヶ月）からなる。

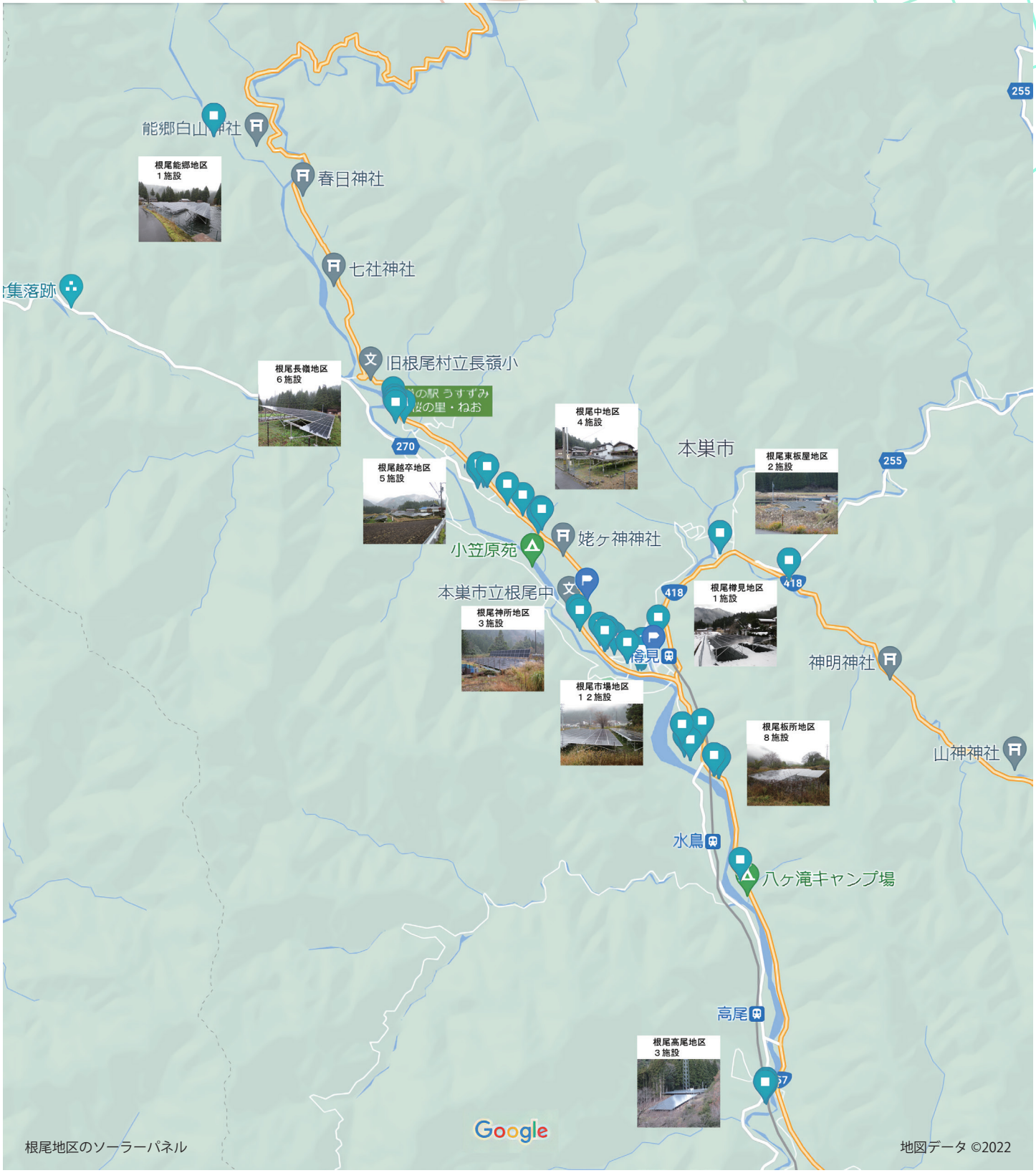
もう一方の業者は、幅広く産業廃棄物を引き受ける処理施設。以前、個人的にお世話になったところである。同施設の加工場では、プラスチックや木質廃棄物を主材とした固形燃料（RPF）への再生を行い、製紙会社に出荷。大型の処理装置を持つため同業者からも引き受け、破砕圧縮することでゴミの減量も行っている。ここで処理できない他の素材については、連携する処理業者に委託する体制となっていた。

古民家の解体をきっかけとした調査を経て、「山の木」から「次の生命」への循環にまでつながった。またそこでは現代社会で実装される循環の一端を垣間見た。しかし、行き先の見つからない資源があるなど課題も残されている。さらには、今回出逢った各場面では、その循環が人類の都合によって管理され、急かされているように感じられる。つい最近「世界中の微生物がプラスチックを食べられるように進化している」という研究成果を目にした。素晴らしい生存戦略だ。むしろ我々こそが、早く「進化」すべきなのかもしれない。

太陽光パネルという新たなインフラの行方

吉田 茂樹

岐阜県本巣市根尾地区にも最近太陽光発電施設が増え、道沿いや集落の外れなどにソーラーパネルが目立つようになってきた。調査の結果 2021 年 12 月現在で根尾地区内に 45 施設確認できた。メガソーラー施設と異なり、ほとんどが手続きが簡素化できる 50kW 未満の施設であり、空き地や耕作放棄地などを利用して設置されている。根尾地区の発電施設にはいくつかの特徴がある。その特徴を見ていくことで、土地の利用やソーラーパネルの扱いなどについて考えてみる。



根尾地区のソーラーパネル

地図データ ©2022



密集型

角度が緩く間隔を狭くして設置されたタイプ。限られた面積の土地を利用して、できるだけ効率よくソーラーパネルを設置するためと思われる。根尾地区のソーラーパネルの多くは個人が所有していた土地をそのまま利用しており、立地や面積、土地の状況などに応じてそれぞれいろいろな工夫がされている。



フラット型

最前列から最後列までほぼ隙間なくソーラーパネルが並べられているタイプ。これも限られた面積の土地を考慮した形であろう。根尾地区の太陽光発電施設は、防草シートなどが設置されておらず、以前の土地の状態のままのものも多いが、このタイプは太陽光が地面に届きにくくなることで、雑草などの繁殖を抑制する効果もある。



高脚型

一般のものに比べ架台の脚が高めのタイプ。このタイプは根尾地区の建設業者が設置・所有しているもので、冬期の降雪時に滑り落ちた雪をより多く溜めて、発電の支障を減らすことを意図してるものと思われる。その土地で暮らしてきた者ならではの経験や知恵が活かされているのであろう。



複合型

二つの異なる設置方式を組み合わせたタイプ。写真のものはフラットに設置されたパネルと急角度で設置されたパネルが組み合わされている。土地の有効利用の他、冬期の降雪による発電障害を少しでも減らすための工夫でもあろう。架台はコンクリートピンコロ（フラット部）と単管パイプ（急角度部）を利用しており、DIY で設置することも可能な形式となっている。

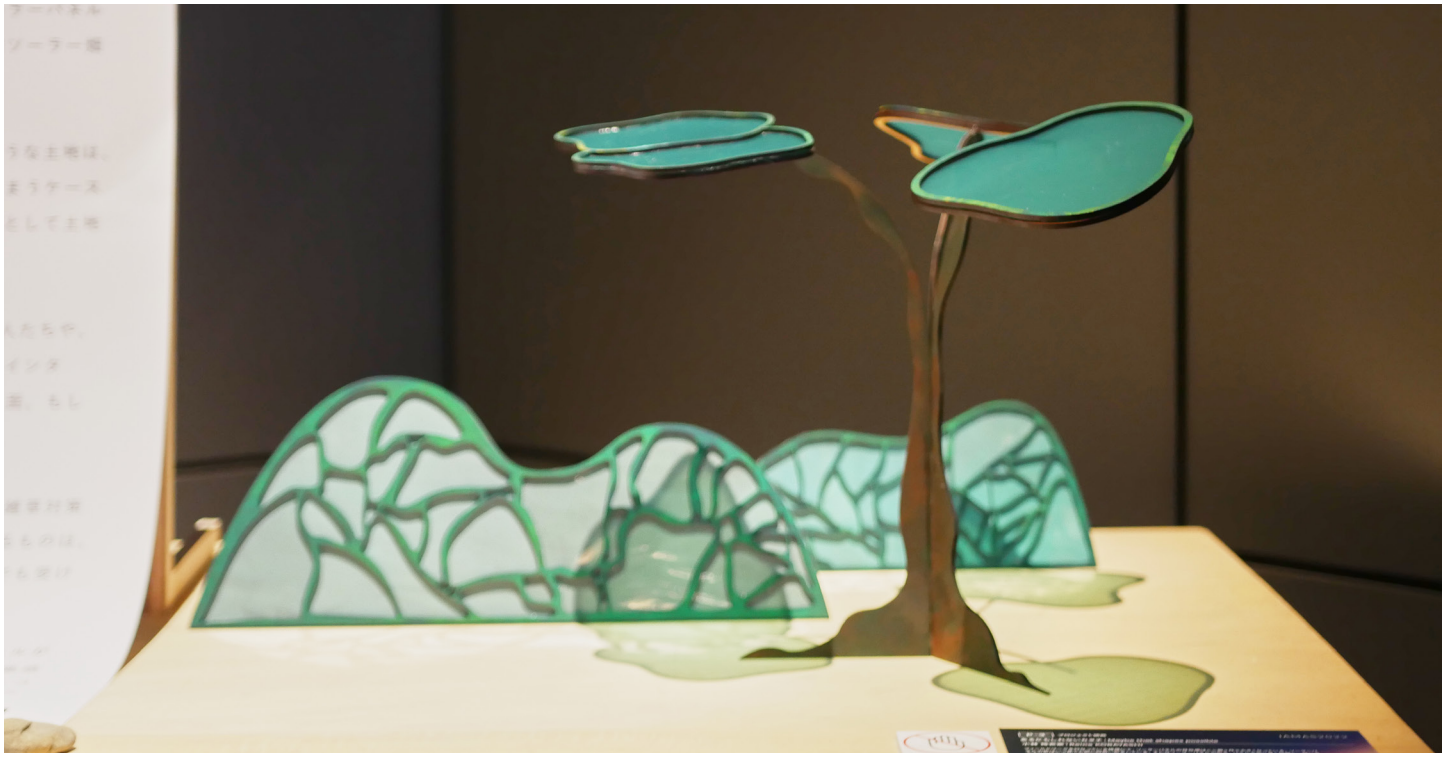


雪対策

根尾地区のソーラーパネルには様々な設置形式があるが、冬期の積雪による影響が大きいものも多い。降雪地域でのソーラーパネルの設置では、冬期の定期的な除雪が推奨されているが、ソーラーパネルの除雪を安全に行うためには高い専門性が必要とされる。根尾地区での今シーズンの降雪後の状況を確認したところ、自然な落雪や融雪にまかせているものがほとんどのようで、冬期の発電についてはあまり期待をしてないのではないか。

あるかもしれないカタチ

小林 玲衣奈









夏の終わり頃から、根尾 (ねお) を訪れる度にソーラーパネルが増えたような気がしていた。実際に調査してみると、2021 年 9 月以降に設置されたソーラーパネルがほとんどだった。つまり、気のせいではなかったのだ。

ソーラーパネルの急増には、国が定める価格で一定期間電気事業者が買い取ることを義務付ける「FIT 制度」が関わっていると考えられる。根尾で急増しているソーラーパネルは、おそらく、高価格時に契約したパネルの設置期間ギリギリに駆け込みで設置されていたと推測される。この秋、根尾北部にある能郷 (のうごう) 集落にソーラーパネルが設置された。周りに住む H.I さんは、「こんなところに建ててもすぐに山の影になるからだめだわ」と言っていた。

ソーラーパネルがたくさん並んだ、いわゆる「ソーラー畑」を景観的に問題視する声がある。一方、農業の視点から見れば、ソーラーパネルの方が米などを育てて販売するよりも、はるかに儲かる。ソーラーパネルを設置することの経済合理性を考慮しつつ、もし、見た目を変えることができたならば、新たなソーラー畑という景観に対して私たちの意識は変わるのだろうか。

ソーラーパネルが置かれる土地の多くは、元々農地だった場所や山間部といった場所だ。このような土地は、維持管理が大変であり、農地も農業以外の目的には利用不可能なため、相続しても放置されてしまうケースが多い。昨今、農業だけで生計を立てていくのは難しい。そのため、土地を手放し、太陽光発電として土地が利用がされることは、土地活用という意味では有効だといえる。

しかし、エコで有効な土地利用法であるソーラーパネルではあるが、土地利用の面とそこに住む人たちや、その風景を見る人の気持ちには違った感情が生じているように感じる。能郷に住む H.N さんへのインタビューの中にも、「ソーラーパネルができて雑草がボーボーだった土地がきれいになって嬉しい反面、もし自分の家の前にソーラーができたら嫌だ」という話があった。

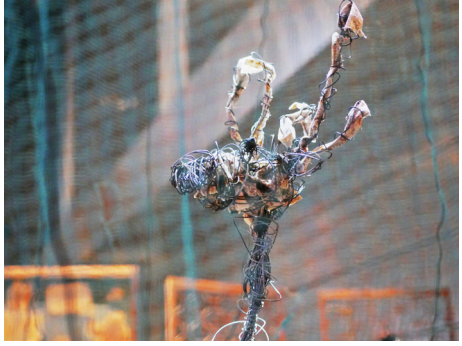
ソーラーパネルは、黒く四角い形をしているが、よく観察してみるとパネルの基礎部分や、土地の雑草対策の方法など、設置業者によって様式や形状が違うことがわかる。雑草対策に銀シートを使用しているものは、眩しそうに見えたり、基礎が単管で組まれているものは、弱々しく見えたり、少しの見た目の変化でも受ける印象は変わる。

土地の維持管理の問題から、ソーラーパネルが有効な利用方法であるとして、今後さらにソーラーパネルが増えるとするならば、山間部はまさにソーラーパネル畑と化し、ソーラーパネルの見た目に関しての嫌悪感や不快感のようなネガティブな感情はもっと増えるかもしれない。生きていくために必要で、身近になりつつあるソーラーパネルたちが、家の隣や玄関先など、自分の生活がある景観の中に入り込んできたとしたらどうだろうか。こうした風景における変化をどのように受け止め、考えていくべきなのだろうか。

IAMAS 2022

鹿

路 雨嘉



私たちが住むこの世界は、人間だけではなく、人間以外の生物や人工物など、互いに協力し影響し合うことで創造されているのではないだろうか。針金と布で制作した「鹿」を森の中に置き、森の生態を探った。約２ヶ月におよぶ森との「共同制作」により、変化した「鹿」をインスタレーション作品として展示する。この「鹿」と森の「共同制作」を観察することで、「種」「コミュニケーション」「共生」についての新たな考え方を模索する。

「森に作品を共同制作してもらいたい」と思いながら森の中に置いた針金の鹿が、森で過ごす３カ月間、野生動物がたくさん訪れ、昼夜の変化や季節の移り変わりによって森と親密になり、次第に「私のもの」から「自立した個体」へと変化していったのです。

今回の展示では、ギャラリーの白い什器に移動し、ネットで囲い、照明を当てています。ギャラリーでは、私の鹿は神聖であるが自由ではなく、遠く離れていて触れることができない存在です。









根尾の盆踊り

王 芯藍





70 代、80 代の住民が中心の根尾の盆踊り保存会には、根尾の盆踊りに魅せられた若者が東京や埼玉からも参加している。私もその一人で、保存会の練習に度々参加していた。ここにあるのは、伝統文化を消さないという平板な物語ではなく、年代、地域、民族を越えて享受されてきた幾重にも重なる物語だ。根尾の盆踊りが好きで一緒に踊るのが楽しいという単純な理由が、地域社会を超えた新たな文化を生みだす原動力となっている。

「今の根尾には若いもんが少なくなった。盆踊りを伝承するには記憶に頼るしかない。」保存会の皆さんは高齢の方が多く、多少盆踊りのことは覚えていないこともある。そのため、皆で互いに協力して、唄と踊りの記憶を合わせて練習している。

私は去年から何度か保存会の盆踊り練習に参加し、唄を聞いて、踊りを見て、感動した。盆踊り保存会は根尾の貴重な文化財を守っている。見たことない踊りと聞いたことない唄で、私は胸がいっぱいになり、外国人の私も根尾盆踊りの伝承者になりたいと思った。

私にとって

IAMAS の CRR Project に参加し、根尾の皆さんとの繋がりができた。その縁から「みんなで根尾の盆踊りを習いに行こう」という機運が生まれ、現在までに何度か保存会の練習に混ぜていただいた。練習のあとは、一緒に日本のことを話したり、農産物を頂いたり、その都度いろいろとお世話になっている。外国人の私が日本の人たちからこのような好意を受けるとは思わなかった。根尾に行くたびに、みんなの好意を受けて、私も根尾の人になったような錯覚に陥った。私にとって、根尾はもう特別な存在になった。





作品

今回の展示では、参加した盆踊り練習会の映像と自分の踊りを転写したフイルム絵を通じて、私と根尾盆踊りのつながりを表現する。根尾盆踊りの素晴らしさを示し、多くの人が根尾盆踊りを理解し、享受することができないでしょうか。この伝統文化をもっと長く伝えるようにしたいという考えが生まれた。

オッパの五郎さん

金山 智子

ごろさん、ごろさ～ん。越波（オッパ）集落の人たちは、集落最年長の松葉五郎さん（91 歳）を親しみを込めて呼ぶ。五郎さんと知り合って 7 年。いつ訪ねても何か作業をしている。

「ごろさん、お話し聴かせて」とお願いすると、「ええよ」といつでも二つ返事。

福井との県境山間部にたたずむ越波・黒津・大河原の三集落は奥三区とも呼ばれている。根尾でも孤立したこの地域に残された記録によれば、ここは 700 年前くらいから存在している。五郎さんは、その越波で 1930 年に生まれた。中学進学のため岐阜に出て、その後名古屋高等理工科学校を受験するも、15 歳の多感な時期に大東亜戦争下の軍事工場で働くようになった。その後、1945 年 1 月に三河地震にみまわれ、半年後の 7 月には岐阜空襲で何もかも失い、根尾に戻って以来、ここの自然と親しみながら暮らしている。

「五郎、手二本で働くのは高が知れる。夜でも昼でも動くものを使わないとあかん」

五郎さんの父の言葉だそうだ。無一文の 19 歳は、偶然「しいたけの栽培」をと出会った。これなら根尾でもできるかもしれない。五郎さんは全国でも実践例がほとんどない中でも、全国の研究者や会社を訪ね研究してその可能性を追求し、ついに越波でしいたけ栽培を始めた。それが五郎さんの初めての起業だった。

30 代に入ると、岐阜県試験場とも協力しながら難しいアマゴ養殖の事業を立ち上げた五郎さんは、小さいながらも岐阜県では名の知れた存在となった。根尾では雪深い冬の季節になると道路が閉鎖され、集落の人たちは皆山を降りる。その中、五郎さんは米と大根百本と自前味噌の蓄えをして唯一人集落に残り、閉ざされた冬の間もアマゴの面倒をみ続けた。

「一人のことをやる。怖さはない。餌をやるのが楽しみ」

五郎さんに気負いはない。伊勢湾台風で集落が壊滅しても、すぐ後に、下の集落で養殖場を作り続けた。しかし、魚のウィルスや輸入飼料高騰などの問題から、80 代半でアマゴ養殖を廃業することになった。その間にも、根尾林業グループの会長を務めながら、拡大造林や投資ビジネスから根尾の山林を守ってきた。アマゴの廃業後も、山葵、キハダ、エゴマなど、山の恵みを生かせる仕事を続けた。そして今、養殖施設跡を使った認知症に効くかもしれない峠芝の栽培に取り組んでいる。

「これがね、もし上手くいったら、オッパにまた人がたくさん来るようになるでしょ」

ひたすら語り続け、少し赤みがかった笑顔の五郎さん。

「五郎さん、峠芝、上手くいくといいね」
「おう。一つもっていけ。」

そう語る五郎さんの瞳には十代の多感な少年のような輝きが感じられた。









根尾の女性とミシン

金山 智子



米国で開発された「ロックステッチ（本縫い）ミシン」は 1851 年にシンガーが販売を始めた。その数年後、ペリーが黒船で再来航した際、将軍徳川家定への献上品の「Sewing Machine」として日本に初上陸した。初めての使い手は、妻の天彰院敬子（篤姫）と言われている。篤姫がミシンを踏む姿を想像するのは何とも愉快だ。"Machine"（マシン）が日本人には「ミシン」と聞こえたことからミシンと呼ばれるようになったそうで、私たちは、「マシン」のことを「ミシン」と呼び続けて今日にいたっているわけだ。

戦後洋裁ブームによりミシンは本格的に日本社会に普及した。女性の洋裁教育と共に洋裁が職業として確立していく時代の中で、ミシンは人気の嫁入り道具となり、ミシン掛けは主婦の仕事にもなった。都市を中心とした洋裁ブームは地方にも広がり、高度成長期には既製服ブームの中、縫製産業は地方の縫製工場で働く女性たちによって支えられた。

繊維業が盛んだった大垣や岐阜の繊維会社も県内に縫製工場を建設し、1970 年代には、根尾にも縫製所がいくつも存在していた。大垣に本社をおく東海ファッションもその一つで、根尾支社では 30 人ほどの女性が縫製作業をしていた。H さんは「家に女 2 人居てもしょうがない」と姑に言われ、ここにくるようになったという。映像に登場するスミさんは、稼業の草刈りや牛たちの世話の合間に 1 年だけアイロン係として働き、休憩時間にミシン縫いを覚えた。地元の黒川縫製で働いていた T さんは、中学卒業後、勧誘され、1 年経たずに正社員となった。

当時使われていたのは「ロック」と呼ばれる工業用ミシン。ずらりとミシンが並ぶ部屋でスカートやズボンの既製服を流れ作業で作っていく。当時は相当忙しかったようで、「トイレにいく暇もなかった。トイレに行っている間に流れてくる服が溜まってしまう」と 17 年間ファスナーの縫付け担当だった H さんは話していた。T さんもミシンは楽しかったが、熱があっても休めずキツかったと話す。「私の青春時代はミシンで終わったのよ」と H さんは笑っていたが、多くの女性が 20 ～ 50 代をミシンと共に生きたとも言えるだろう。1990 年代頃からどの工場も中国人女性たちを雇い、また、安い労働力を求めて海外生産拠点を移転する企業が急増していき、根尾の縫製工場は次第に消えていった。

根尾でも、大きくて、重くて、操作が面倒で、騒がしいロックミシンは邪魔もの扱いとなり、多くが処分されてしまった。一方、ミシンそのものはどんどん進化し、小型電子化されていく。今やミシンは、いつでもどこでも誰でも使えるマシンになったのである。そんな時代になっても、かつてのロックミシンを今でも大切にし、当時覚えた技術を使って、子どものマスクを作ったり、自分の服や友人の服の直しに使ったりしている女性たちがいる。

大きく、重く、簡単に動かすこともできないマシンだけれど、それを踏む女性たちの足取りと心は驚くほど軽く、楽しげで、その眼差しは真剣だ。彼女たちにとってミシンは、昭和、平成を経て、令和を迎えた今でも地域で自立共生してゆくための道具なのだ。


PEGASUS


BROTHER




20
25

システム化された現代社会への考察

上森 拓

Book Review



「レジリエンス思考 ― 変わりゆく環境と生きる」

ブライアン・ウォーカー , デイヴィッド・ソルト（著）
黒川耕大（訳）, 2020 年 , みすず書房

変化を恐れずしなやかに生きる力

もし人類が、自然を開拓した 100 年後にどんな問題が起きるのか知っていたら、その開発を止めることが出来るだろうか、いやそんなことはないだろう。著者は「人間は、将来の問題を大きく割り引いて考えるくせがあり、近い将来に取り組まなくてもよい問題は未来の世代が解決してくれると信じてしまう驚くべき能力がある」と皮肉的に書いている。

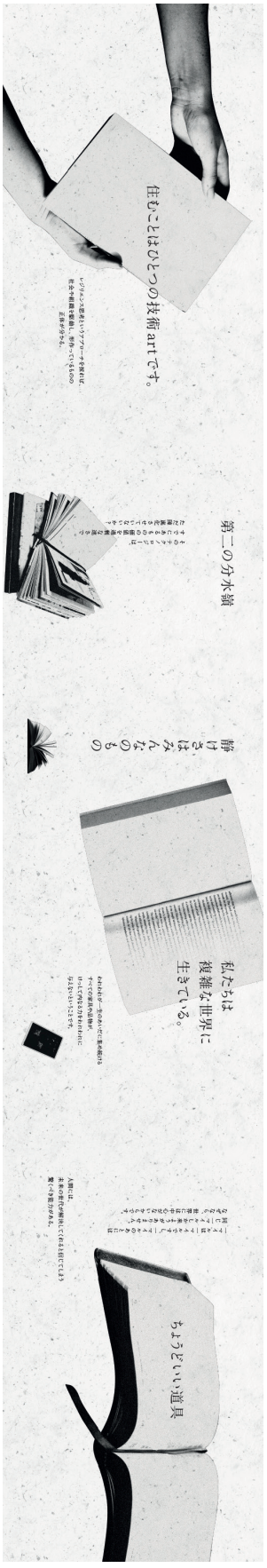
タイトルにある「レジリエンス」とは「システムが攪乱を吸収しながらも、基本的な機能と構造を維持する能力」を言う。最近ではストレス社会を生き抜く術としてビジネス書で見かけることも多いが、本来は地球の生態系に関する思考である。本書はレジリエンス思考による環境保全を提唱し、レジリエンスの観点から地球環境を考える術を様々な事例から解説したものである。

世界中で失われつつある珊瑚礁、脆弱化が進む世界有数の湿地帯、改良されて胸が肥大化し自然な交配ができない肉用鶏。私も知らずにその肉を食べているだろうし、こういった状況に自然と加担するシステムの中を生きている。ではその現実にどう向き合っていけばいいのだろうか。

人間の都合により生態系が崩れて元の状態にもどることが難しい状況を、本書では「レジーム」という言葉で説明している。レジームとは「システムがその振る舞い方を変えずに、同じアイデンティティ（同じ構造と機能）を保ったままとりうる一連の状態」であり、その生態系が閾値を超え別の状態に移ることを「レジーム・シフト」と言う。改良された鶏は既に閾値を超えていると言えよう。

著者は「レジリエンス思考というアプローチを採れば、私たちがもっとも関心を寄せるシステムである社会や組織を駆動したり形作ったりしているものの正体が分かる」と述べているが、私が CRR プロジェクト（CRR：Community Resilience Research）に参加したのも、まさにこの「レジリエンス」という言葉に惹かれたからだ。

フィールドワークで訪れた限界集落に住む女性は、空いてる土地を売って欲しいと多くの企業が来るが「無くなると寂しいから売らない」と言う。幼い頃から遊び慣れた森は「資産価値のある資源」ではなく、彼女と共に生きている存在なのだろう。気負わない彼女の言葉が胸に響いた。私たちは自然とどう共生していくべきなのか、レジリエンス思考を紐解きながら探っていきたいと思う。





「生きる思想 ― 反 = 教育 / 技術 / 生命」

イバン・イリイチ（著）
桜井直文（訳）, 1999 年 , 藤原書店

痛烈な思想家のまなざしに圧倒される

カトリックの神父という異色の経歴を持つ思想家、イバン・イリイチ（1926-2002）。本書は彼の思想や活動を幅広くまとめた集大成とも言える一冊である。

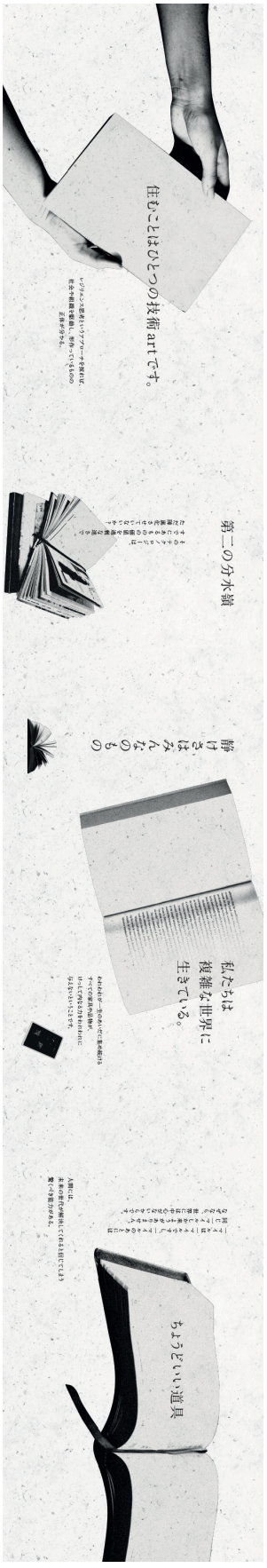
過剰に制度化されていく教会に疑問を持ち、思想家へと転身したイリイチは、一貫して人間本来の自由や生き方を思索し、人間が作り出した社会制度を鋭く批判していく。そして、学校、医療、交通（インフラ）など、本来私たちの生活を豊かにしているはずの社会制度が、実は私たち本来の生き生きした人間性を損なっているのだと主張した。ここにイリイチの思想の中心がある。

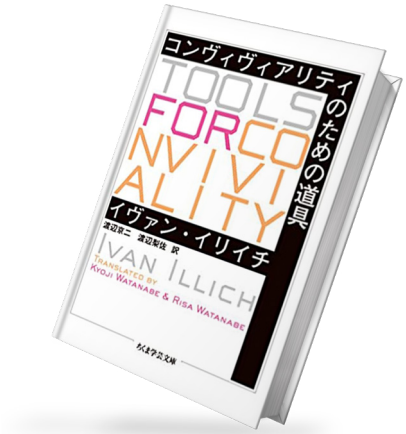
正直読み始めたときは、兎にも角にも批判的で目に映るもの全てが気に食わない頑固者（何て口の悪い奴なんだろう）と思ったが、読み進めるうちにその言葉の的確さにぐうの音も出なくなっていた。むしろ現状の問題を的確に指摘する最も相応しい言葉として響いてきたのである。過剰に批判的な彼の言葉は一種のパフォーマンスでもあり、自身をキャラクター化することで己の主張を印象づけている面もあるが、本書ではそれが更に文字として強く迫ってくる感覚を覚えるだろう。

本書においてイリイチは「健康」のサービス化にも警鐘を鳴らしている。医療をサービスとして過剰に享受することや、医療関係者が定義づける健康観に対しても批判を向け、「病気とは何かを定義する権力」「誰が病気として診断されるべきかを決定する権力」によって私たちの健康観が「つくられて」、健康と不健康の概念を生み出し、健康＝幸福だと刷り込まれているのだと。

勿論、生活に苦悩が無いに越したことはないが、ここで言う「健康」は、もっと元気に効率的に生産してくれという社会の要請なのだろうと考えが至る。現代を生きる私たちの「健康」がいかにサービス化されて本来の医療より規模が大きいものになっているのかを彼は指摘しているのだ。

1986 年に来日したイリイチは 2 ヶ月の滞在を経て帰国する際、「社会心理の破綻への道を最も先まで進んでいるという意味で『最先端』の社会の中で生活したという印象を持った」と述べている。当時の日本はバブル好景気真っ只中であり、過剰な効率性を追い求めて制度化を進める状況に、悲しみ嘆いたか怒り狂っていたのだろう。果たしてこれは 36 年前の笑い話だろうか。2022 年の日本を彼が見たら、きっと更なる痛烈な言葉で社会心理の破綻の切迫を訴えるのではないかと想像する。





「コンヴィヴィアリティのための道具」

イバン・イリイチ（著）
渡辺京二 , 渡辺梨佐（訳）, 2015 年 , 筑摩書房

人間が本来持っていた力を取り戻すには

根尾のフィールドワークで出会ったゴロウさんは「コンヴィヴィアリティ」を体現しているような人だ。長老ともいうべき年齢ながら、狩猟、養殖、薬草作りと様々な生業に加えて新たなビジネスも生み出し続けている超人である。

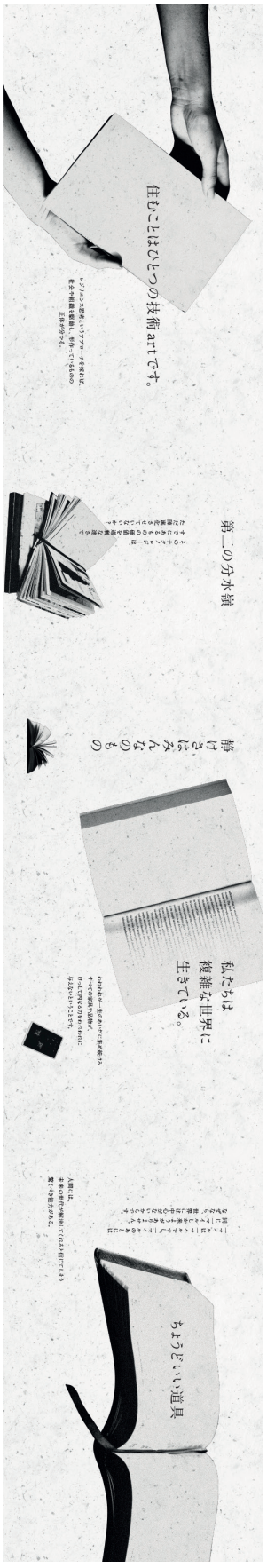
私たちの生活を豊かにしてくれているはずの社会的サービスの根幹には様々な権力の構造があり、それによって私たちの自立というものが失われていると主張した著者のイリイチは、過剰な効率性を追い求めることから少し離れて、地に足のついた生き方に立ち返ろうと訴えた。その核となる考え方が本書で扱われる「コンヴィヴィアリティ（自立共生）」という言葉だ。

人間が自ら作り出す道具（本来の道具だけではなく、医療や教育、インフラなどの社会システムも含む）によって、人間が本来持っていた力を失っていく。自ら破綻に突き進む馬鹿げたプレイのようだが、今を生きる私達にとってこの状況から抜け出すことが難しいのも事実である。

デザインエンジニアの緒方壽人氏（Takram）は、イリイチに関する著書『コンヴィヴィアル・テクノロジー』の中で、道具は本来「つくる」だけでなく「手放す」ことができると述べている。ノコギリを例に挙げ、使い終わったら一旦手放してまた必要な時に手にすればいい。自分以外の誰かが使ってもいいし、「手放す」ことは「捨てる」ことではないと。

その昔、根尾のゴロウさんは、富山から来た行商人（ノコギリや金物の道具売り）が商売が終わって帰る際には、残った商品を一緒に担いで途中まで運んでいたと言う。そこには現代の「サービスを提供する側・される側」の分断された関係ではなく、重たい荷物があるから助け合って運ぶという自然な姿があった。

都市生活で様々なサービスを享受してきた私は「ユーザー」であり、暗黙のうちに「作る人」と「使う人」を分けて考え、効率的な豊かさを追求してきた。一方で、人と道具のちょうどいい関係性が根尾の暮らしには息付いていると感じる。それを超えて道具が人間本来の力を奪う領域に達してしまうことを危惧したイリイチの「コンヴィヴィアリティ」という思想は、私たちがこれから道具とどうやって付き合っていくべきなのか、沢山のヒントを与えてくれている。



活動リスト2021

2021.04.24	越波集落	越波フィールドワーク、打合せ
2021.05.02	越波集落	越波集落春祭り
2021.05.10	越波集落、ねおこ座、ジャッキーハウス	越波フィールドワーク、ワークショップ
2021.06.07	金生山明星輪寺、石灰採掘現場	明星輪寺訪問、周辺フィールドワーク、採掘現場の見学
2021.06.12	能郷集落	水源調査、葉名尻さん＆スミさん（畑や辣韮漬けの見学、芋煮）
2021.06.14	御首神社、南宮大社	御首神社、南宮大社フィールドワーク
2021.06.18	根尾畑	手入れ
2021.06.25	春日　森の博物館、マチュピチュ（茶畑）	博物館見学、リニューアル打合せ
2021.06.28	能郷集落	フィールドワーク、住民４名Ｇインタビュー
2021.07.01	能郷集落	解体現場の視察
2021.07.02	本巣市チップ工場	廃棄物処理プロセスの調査
2021.07.05	能郷集落	葉名尻さんインタビュー
2021.07.05	輪之内町	廃棄物処理プロセスの調査
2021.07.07	海津町	廃棄物処理プロセスの調査
2021.07.08	高尾の甲重機、能郷集落（解体現場）	解体に関係する重機の視察、解体現場の視察
2021.07.08	能郷集落	葉名尻さんインタビュー
2021.07.09	能郷集落	フィールドワーク、葉名尻さん盆踊りの話、金子さん訪問
2021.07.09	員弁町、羽島市	廃棄物処理プロセスの調査
2021.07.14	根尾盆踊り練習 , 越卒集落	ミシンインタビュー
2021.07.16	県博物館	展示打ち合わせ
2021.07.26	畑、能郷集落	
2021.07.28	根尾盆踊り練習	
2021.07.29	春日森の文化博物館	打ち合わせ、見学
2021.08.14	越波集落、アーティスト林さん宅	夏祭り参与観察、交流
2021.08.17	内藤記念くすり博物館	見学
2021.10.08	越卒集落	畑、所さん
2021.10.10	春日森の文化博物館	参与観察
2021.10.15	越波集落、畑	五郎さんインタビュー
2021.10.22	美濃まほろば、畑	打ち合わせ
2021.10.31	春日	参与観察
2021.11.06	根尾盆踊り練習	
2021.11.22	能郷集落	インタビュー
2021.12.04	根尾盆踊り練習 (長嶺拝殿）	
2021.12.21	門脇集落	調理、交流
2022.01.22	能郷集落	参与観察

SPECIAL THANKS!

松葉五郎
松葉恵美子
葉名尻義一
葉名尻紀子
所孝一
羽田すみ子
上杉勝司
吉田雄樹
高橋保直
灰田有ご夫妻
吉田喜作
根尾おどり保存会
中洞今子
羽田久美枝
島田慈子
林隆一
金子典栄
松葉修治
洞口豊美
中原淳
岐阜県立博物館
春日森の文化博物館
お食事・喫茶たなか
美濃のまほろば
甲重機
ウッドエンジニアリング（株）
エコム カワムラ（株）

COMMUNITY RESILIENCE RESEARCH 2021

プロジェクトメンバー　金山 智子・小林 孝浩・吉田 茂樹
メノン カルティカ・上森 拓・工藤 麻里・小林 玲衣奈・路 雨嘉・王 芯藍

発行者　Community Resilience Research 2021 (IAMAS Project)

発行日　2022.07.04

デザイン　山口 伊生人